

「日本はここまでやるのか！」

世界をあっと言わせた史上最大の文学イベント開催。



大江健三郎さんの基調講演で開幕



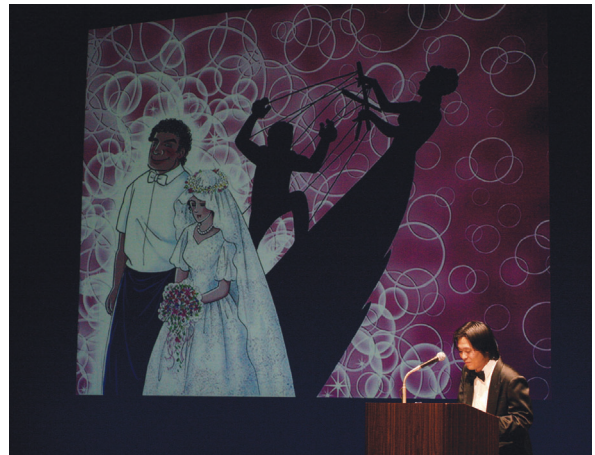
俵万智さんと黒田杏子さんの選による俳句・短歌「阪神大震災を詠む」の発表

「世界P.E.N. フォーラム2008」に集まった世界の関係者やマスコミは目を見張った。それまでイメージしていた文学フォーラムとはまったく異なっていたからである。「災害と文化」をテーマとして開催されたこのイベントでは、映像、音楽、朗読、絵画などさまざまな手法を駆使した発表が行われ、エンターテインメントといってもよい内容だった。

「もっと文学の香りのする、楽しいフォーラムを」
吉岡忍さんの発想で企画が始まる。

「世界P.E.N. フォーラム2008」は2008年2月22日から4日間にわたり全労災ホールで開催された。主催は社団法人日本ペンクラブである。このフォーラムの企画が始まったのは開催日から2年半前。同クラブの常務理事で作家の吉岡忍さんが世界中の文学フォーラムに参加する中で、「会議ばかりで堅苦しいものではなく、もっと文学の香りのするものができないか」と感じたところから始まり、準備委員会が設置され構想が固められていった。

「地球環境というテーマがまず考えられましたが、文学との関係から語るのであれば、もう少し人によった形の『災害と文化』から語るべきではないか」という意見があり、今



イラストに朗読とピアノ演奏を重ねた異色の作品もあった

回のテーマになりました。災害を扱った文学はとて多いいですからね。それにしても、ここまでの内容になるとは思いませんでした」と同クラブの吉澤一成事務局長が語るように、濃厚で多彩なメニューとなった。

フォーラムは阿刀田高会長の開会のあいさつのあと、大江健三郎さんの基調講演で始まった。戦時中、四国の谷間にあった実家で大風と豪雨の音を聞きながら、母親の語る先祖の話に耳を傾けた時代から、原爆というあまりの大惨事を前にして自らの無力さを感じて自殺してしまった広島若き医師の話、知的障がいを持って生まれた我が子の話、そして「沖縄ノート」に対する名誉毀損裁判の

話など、大江さんの人生を振り返りながら、自分の「人」への考え方の変遷が語られていった。しかしどんな場合でも、人は恢復するものととらえ、楽観的に考えるようにすべきであるとして「意志の行為としての楽観主義」というテーマを語り終えた。ノーベル文学賞受賞作家の話をかいつまんで説明しきれないが、時折ジョークを交えて聴衆を引きつけながら淡々と語り続け、人間的な基調講演だった。「大江さん自身、しばらく昂揚さめやらぬ感じでしたね」と吉澤事務局長が教えてくれた。こうした熱の入れようは、他のイベントも推して知るべしである。発表者もメニューも実に多彩だ。

例えば「小説サラブレッド」は、人気漫画家里中満智子さんのイラストを、活動写真弁士片岡一郎さんが読み解き、柳下美恵さんのピアノが彩る。その他、井上ひさしさんが書き下ろした朗読劇「リトル・ボーイ、ビッグ・タイフーン」、立松和平さんのオーディオドラマ「浅間」などいずれも聞き応えは十分だった。

手弁当でかけつけてくれた参加者の熱意から、アイデアが次々と生まれた。

海外からも、現代中国文学の最高峰と言われる莫言さんや、インド洋大津波を経験したタイの作家ルークジャンさん、インドネシアの小説家リンダ・クリスタンティさんなどが作品を提供してくれた。

「海外から参加した皆さんには一様に、日本はここまでやるのか、と賞賛していただきました。日本語に翻訳した際に多少アレンジを行い、再度翻訳して原作者にチェックし

ていただきましたが、クレームもまったくありません。莫言さんはノーベル賞もささやかれる大作家ですが、最後に鶏の鳴き声をマネしてくれましたし、心から楽しんでいただけたようです」と吉澤事務局長は語る。

観客も前夜祭を含めて4千人に達し、一部立ち見が出るなど予想を超えた反響だった。普段、あまり文学に触れることのない人にも楽しんでいただけたことは成果の一つだという。

前例のない形式のイベントのため、その準備には課題も多かった。ただ、参加者がみな主旨に賛同して積極的になってくれたのがこの成功につながったという。

「皆さんに二つ返事で快諾していただいて、手弁当でかけつけてくれましたし、講演料は運営費に充ててくださいという方もいらっしゃいました。それだけに打ち合わせでも大いに盛り上がり、それぞれの立場から新しいアイデアがどんどん生まれていったのです」

今回のイベントには舞台監督はいるが、演出家はいない。吉岡忍さんらが中心となって、演出を決めていった。舞台監督からは「プロだったら、ここまでたくさんイベントを同時には行わない」と苦笑されたそうだが、アマだから熱気で乗り越えられた部分もあるという。

こうして大成功を収めたフォーラムだが、実は続きがある。2010年度に行われる「国際ペン」の国際大会に、日本は立候補しようとしているのだ。そのテーマはフォーラムの流れを受けていよいよ「地球環境」と考えている。その点で、今回招待した国際ペンの幹部たちにも十分なアピールができたことだろう。

●担当者より

質を落とさないという意欲が、史上最大の文学イベントの成功につながりました。



今回のフォーラムはAJOSCさんを始め多くの善意を受けての催しでしたので、無駄なことはないよう切り詰められるところは切り詰めて、しかし、内容や質は落とさないという気持ちで臨みました。おかげさまで、間違いなく史上最大の文学イベントができたと思います。また、文学以外の分野の方々との交流も深めることができ、クラブの会員の結束にもつながりました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

社団法人 日本ペンクラブ 事務局長 吉澤一成さん